

賢治随想

—「霊性と文学」をめぐる—

初出「でくのぼろ宮沢賢治の会 特別号」（2004年）

小野寺功

一 宮沢賢治と私

私はとくに賢治の研究者というわけではなく、単なる愛好家に過ぎないが、ただ最近彼の「大地の思想」に共鳴して、本格的な出会いを経験しつつある。

そのきっかけになったのは、三年ほど前に、評論『賢治・幾多郎・大拙——大地の文学』（春風社）を書き、出版したことであった。

これは一見して相互に無関係と思われる作家宮沢賢治と、哲学者西田幾多郎、禅思想家鈴木大拙の、三人に共通する思想性をとりあげて論じたもので、ここに私なりの重要な発見があったと思われるからである。

今度、この本が再版されることになったので、ついでに内容の不足を補つてもう一篇「新世紀の風

——宮沢賢治の「靈性文学」を追加することにした。これによつてさらに明確になったことは、この三人は他の多くの日本の知識人とは違つて、共に「靈性」に立脚する、「いのちの思想家」であるということであつた。

その中でも、とりわけ宮沢賢治の場合には、思想的な大地性の根が、縄文文化の深層にまで及んでおり、今後日本の靈性の哲学を深大に培うためには、どうしてもこの根に着目する必要があると思うのである。

鈴木大拙の名著『日本の靈性』が、西田幾多郎の「場所的論理と宗教的世界観」に大きな影響を与えたことは、よく知られた事実である。しかしさらにその根底に、賢治の「大地の文学」の思想を据えたいというのが私の衷心からの願いである。

大体以上のことが現在の私の関心事であるが、考えてみると、賢治との出会いは、はるか以前から準備されていたのかも知れない。

それというのも、私の生まれ故郷は、賢治の花巻と、柳田国男の『遠野物語』で知られる遠野の間地帯にある東和町（旧土沢）で、岩手軽便鉄道で、旧制花巻中学に通つていたからである。

同級生に八木忠爾君という大変元氣のよい、よくできる生徒がいた。彼の父親は、賢治が花巻の川口小学校三、四年の時の担任で、よく童話を生徒に話して聞かせるのが好きであつたという八木英三先生で、何度かその特異な風貌を見かけたことがある。

八木君によると、賢治が童話に関心をもつようになったきっかけは、八木先生のお蔭だと、直接お

礼を言われたことがあると父親がよく話していたということであった。

また羽田という漢文担当の先生の時間に、たまたま「百姓窮乏」という読み方をした生徒がいた。先生はこれをきびしくたしなめ、「百姓窮乏」と読むべきだと主張された。その理由は「百姓」では、その職業を馬鹿にするような響きがあるからだということであった。

その講釈が少し長かったたので、授業が済んでから「先生は何であんなことにこだわるのかなア」と友人に聞いてみたことがある。その時、友人がさりげなく「羽田先生は、宮沢賢治と非常に親しかったという話だよ」と答えたことが、妙に印象に残っている。

また当時は戦争中だったので、よく勤労奉仕に駆り出され、農家の手伝いや北上川の流域で、鉄道のための砂利運びなどをやらされた。そして真夏日には解散後、賢治がイギリス海岸と名付けたあのあたりで、水泳をしたり、化石探しをしたことを、昨日のこのようによく想い出すことがある。

また勤労働員の無理が祟って、花巻病院に入院した時、私の担当医は、かつて賢治の主治医であり、後に名著『宮沢賢治』を書かれた佐藤隆房先生であった。この病院には賢治が設計したという花壇があり、たまたま賢治が病気で入院した時、担当だったという看護婦さんに会ったこともある。彼女は、賢治が退院の日、大変お世話になったからと、お礼にといつももらったという花の栽培についての二冊の部厚い本を大切に持っていた。賢治の印象としては、退院当日に、ベッドの上にきちんと正座してお礼を言うような、とても礼儀正しい人だったということをおられた。

ただこうした事柄は、すべて外面的なものばかりで、賢治その人に対する関心は、常識程度にとどまっていたと思う。それが一步深まったのは、戦後小学校教師をめざして、盛岡市上田にある岩手師

範学校に入學してからのことである。それというのも、下宿先が盛岡市上田の賢治が学んだ高等農林学校のすぐそばで、緑の色濃い並木道を散策する時は、何となく彼が過した学生時代のことなどが、あれこれと推察された。しかしその頃はまだ賢治についての伝記的関心は全くなかったと思う。

岩手師範を卒業する頃は、体調が悪く、教職は無理なように思われたので、当時新制に切り変わった岩手大学教育学部の研究室に一年間勤務することになった。そのために下宿先を盛岡の北山に移したが、このあたりは古くから南部藩の寺町で、近くには賢治が仏教夏期講習会に出席したという願教寺や、一時下宿していた清養院などがあり、彼の仏教との関係が、その雰囲気から何となく偲ばれた。四年間盛岡に在住している間、一番好きだったのは、市の中央にある岩手公園の不来方城跡こずかたから、向うはるかに岩手山を望む景色であった。賢治も岩手山には深く魅了された。そして中学以来、登った回数は数えきれないほどである。

「春と修羅」では、石川啄木とは全く違う硬質な言葉と光りの中で、宇宙の底から凝視したように、つぎのように歌いあげている。

岩手山

そらの散乱反射のなかに
古ぼけて黒くゑぐるもの
ひかりの微塵みじん系列の底に
きたなくしろくよど澱むもの

それで、これは私の推測にすぎないが、賢治がイーハトーヴと呼ぶ自然に、とくに熱愛に近い情感を抱くようになったのは、盛岡中学時代の岩手山への登山から始まったのではないかと思う。

したがって私の考えでは、盛岡市周辺の地域が岩手山、花巻周辺の中心が種山ヶ原、釜石線沿いが遠野の早池峰山、南が達谷の洞窟、そしてこれをつなぐ東北線の沿線一帯が、イーハトーヴの中核をなす地域とみてよいであろう。

その場合、イーハトーヴは岩手を意味するエスぺラント読みで、郷土性と世界性を同時に意味する言葉であるから、本来はいつでも、だれでもそこに立つことができる母なる大地である。

以上は賢治との「出会いまで」の外面史に過ぎない。ただ私にとって、イーハトーヴの風土体験は共通であり、賢治文学の真実性が、魂のめざめと共に、毛穴から滲み透るように理解されてきたことも、否定できない事実である。そして今は、賢治の「霊性文学」が、私にとって二十一世紀の道標といった意味合いをもったものに変化してきている。そうした想いを、以下にまともまらぬまま綴ってみたと思う。

二二 賢治の「霊性文学」

手始めに「春と修羅」第一集をみると、私の故郷の土沢の町の市日を歌ったかなり長い一篇の詩があるのが目についた。これは昭和二年二月、「銅羅」十号に発表したものである。